



会計ビッグバンの闇  
【第2章】

連載

## 【第2話】 南の島に降り立って

公認会計士・税理士 田中 義幸

### ●本屋の風景

カンボジアの首都プノンペンで一番大きいという本屋に行ってみて驚いた。客が私以外にいないのである。昼下がりのいい時間帯で、30分ぐらいはそこにいたと思うが、その間に一人二人現地の学生らしい人が入って来るのを見かけた程度で、見事にフロアは閑散としていた。

それから驚いたのは、置いてある本のあまりの貧弱さである。全般にあまり印刷のよくない、薄っぺらなパンフレットのようなものが商品として並べられているのだ。多少厚手の本もあり、出版元はどこだろうと奥付を見ると中国やインドになっている。ハードカバーの本は、ほとんどなく、特にインドで出版されている英語のペーパーバック仕様の本が多い。フランス語の本も少し置いてある。といっても、プノンペンの空港内にあるツーリスト向けの書店の方が、まだ品ぞろえは充実している感じがする。

案内してくれた人は、ロンドンにある大学の大学院で開発経済学を学んだという若い日本人女性で、プノンペンの国立図書館に行っても蔵書がほとんどなく、あまりの荒廃ぶりにため息が出たということだった。

カンボジアでは教師や医師や技師、それらしいメガネをかけた人はみな殺された時代があった。そのために本を読む人がいなくなってしまうたり、教育の空白期ができたりで、読書の習慣や文化が衰えたのである。そもそ

も、四十代五十代の人たちの識字率は、50%を切るのではないかといわれていて、あちこちで識字教育が行われているが、その年齢に達すると学習を継続するのはなかなか難しいようだ。

出張の最後の日の午後に少し時間ができたので、どこでも好きなところに案内してくれるという。私はすかさず大きな本屋がいいといって、冒頭の話になったのである。昔から、旅をすると、まずその街の書店に行くのが習い性になっている。書店をランドマークにして、頭の中にその街の地図ができるのだが、同時にその街の中心になる本屋にどんな本が置いてあるかで、その街の様子が何となくつかめて、安心して街を歩ける気がするのである。

この間は、ANAの機内誌に連載されている『おべんとうの時間』が単行本になっていると知ったので、四国の高松に着いて真っ先に本屋に行き探してもらったら、ワイシャツにネクタイの社員が店の奥から何人も出てきて対応してくれたので、さすがに菊池寛の出たところだけのことはあると感心しつつ、余計なことだろうが書店の行末が心配になった。

羽田に行くのに必ずモノレールを使うのは、浜松町の大きな本屋に立ち寄れるからである。大阪や京都、仙台や福岡などに行っても、一人だと書店巡りをしていることが多く、書店経営者でもないのに一体俺は何をしているんだと、時にばかばかしく思いながら、それでもやめない。やめられない。習い性というの

#### 参考

- ・『おべんとうの時間』阿部了(写真)・阿部直美(文)共著(木楽舎)
- ※ 全日空機内誌『翼の王国』連載のフォトエッセイを書籍にしたもの。
- ・八切止夫(1914?～1987)は、歴史小説家、日本シエル出版代表。「八切史観」と呼ばれる独自の歴史観を展開した。サンカ研究家としても知られる。
- ・『ガラスの仮面』美内すずえ著(白泉社)
- ※ 現在、花とゆめコミックスで49巻まで発行されている。